

令和7年度

「運営に関する計画・自己評価」  
(最終評価)

大阪市立春日出小学校

令和8年2月

## 1 学校運営の中期目標

## 現状と課題

## 【安全・安心な教育の推進】にかかわって

- ① 学校で認知したいじめについては、いじめアンケートを定期的実施するとともに、教職員が日頃から児童を見取ったり会話したりして早期発見を心掛け、問題があった場合は早期対応に努めたため、100%解消できている。しかしながら、様々な問題に起因による不登校は発生しており、今後も家庭との連携はもとより、区役所やこどもサポートネット、こども相談センターなどの関係諸機関と連携を密にする必要がある。
- ② 防災・減災教育の推進では、ハザードマップ、防災チェックシート、防災マップの配付と活用などの取り組みを継続的に行っている。避難訓練は、年3回の実施をしている、これらの活動を継続的に行うとともに、児童のみならず教職員も含めて、防災意識の向上に努めていく必要がある。本校は、海拔0mより低い個所もあり、特に水害については、取り組みの充実に努める。
- ③ 道徳教育の推進では、教科との横断的な指導が不可欠となっている。年間指導計画を検討し、教科横断的な道徳教育を展開する。
- ④ インクルーシブ教育システムの充実と推進では、特別支援教育部会や全体会、校内委員会などを定期的開催し、校内での共有理解を深め、組織で対応できるように努める、また、児童の現状に応じて、保護者との連携を密に行いながら、個別支援計画を見直すなど、児童に寄り添ったかわりをめざす。さらに、学校全体でインクルーシブ教育システム構築を進めると同時に、支援を必要とする児童に対する周囲の理解を深めるため、今後も工夫して取り組みを行っていく。
- ⑤ 安全で安心できる学校、教育環境の実現では、学校生活チェックシートの活用により、児童1人ひとりが、毎月1回は学校生活を振り返る機会を設ける。

## 【未来を切り拓く学力・体力の向上】にかかわって

- ① 令和2年度の学校評価アンケートにおいて「自分の考えをわかりやすく説明することができる」の肯定的回答は目標の70%に対して66.6%だったが、令和3年度は、73.7%と肯定的回答の割合が増えていることから、徐々に自らの「説明する力」「話す力」に自信がもてる児童が増えてきているということがわかる。また、「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」の肯定的回答は74.2%から85.2%と大きく増加しており、各学年で対話的な学習形態が定着しよりよい問題解決に向かって前向きに取り組み始めているということがわかる。今年度は学校評価アンケートにおける肯定的な回答の割合を増やしていくためにも、子どものメタ認知を促す具体的方策を検討し、学習の成果を確認し学力の向上を実感することや、自分の課題に気づき解決していこうとする意欲につなげていくことを通して自己肯定感を高める工夫が必要である。
- ② 重点目標を「跳ぶ」力の向上と設定し、教職員向けの研修会や運動場の環境整備を実施するとともに、体力づくり週間を「なわとび」に種目をしばって3回実施した。それぞれ基本的な跳び方、長なわとび、リズムなわとびと跳び方を変えることで、児童の意欲の向上と継続につなげることができ、児童の「跳ぶ」ことへの意識を高めることができた。全国体力・運動習慣等調査において「立ち幅跳び」は男女ともに全国平均を下回る結果となったが、「反復横跳び」は男女ともに全国平均を上回った。また、「50m走」「20mシャトルラン」については男女ともに全国平均を上回っている。本校では平成28年度から平成30年度まで3年に渡って「走る力」に重点をおいて指導を重ねてきた。その成果が表れているものと思われる。したがって、「跳ぶ力」についても継続して指導を重ねることにより成果につながると考えられる。

校舎の増改築により運動場が狭い状態がしばらく続く。安全面の確保を第一に考えながら、体力の向上に向けての取り組みや方策を引き続き検討・改善していく必要がある。また、子どもたちが自分の体力の向上を実感できるようなツールの開発も進めていかなければならない。

## 【学びを支える教育環境の充実】にかかわって

- ① 国語科・算数科の基礎的・基本的な学習内容の理解の定着を目指し、朝の学習の時間を有効に活用していく必要がある。また、学力経年調査や全国学力学習状況調査の問題に対応できる力をつけるため、校内で組織的に過去問題等の学習プリントに取り組んでいく。  
各教室の授業用PCに整備されているモジュール学習で使用できるソフトや英語関係の教材、国語・算数のデジタル教科書を活用し、それを大型テレビに投影することで児童の意欲や学習効果

を高めることができた。また、タブレットの活用の仕方を研究し授業を公開することで、学校全体でタブレットの様々な機能や効果的な使い方を共有できた。学校評価アンケートにおいても、「ICT 機器を使った授業はわかりやすい」の肯定的な回答が 86.9%と目標の 80%を上回っており、取り組みの成果が見える。「プログラミング教育」においても ICT との関連は深いので、併せて研究・研修を進めていく。そのためにも、タブレットの台数やプログラミング教育の教材、通信環境の改善など ICT 機器を活用しやすい環境の整備が急務である。

- ② 超過勤務月 45 時間を超える教職員の割合が 15.38%であった。教材研究や諸会議、児童や保護者対応等で、勤務時間が超過している。校務支援システムの機能を通じて ICT 機器を活用し、業務の効率化を図る。

#### 中期目標

##### 【安全・安心な教育の推進】

- ① 小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を 90%以上にする。
- ② 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。
- ③ 小学校学力経年調査における「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を 96%以上にする。

##### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- ① 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を 35%以上にする。
- ② 小学校学力経年調査における、「国語の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より 2 ポイント向上させる。
- ③ 小学校学力経年調査における、「毎日、同じぐらいの時刻にねて、同じぐらいの時刻に起きていますか」に対して肯定的に回答する児童の割合を 89%以上にする。

##### 【学びを支える教育環境の充実】

- ① 授業日において、児童の 8 割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の 50%以上にする。
- ② 第 2 期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる、教員の勤務時間の上限に関する基準 2 を満たす教職員の割合を 84.9%以上にする。

## 2 中期目標の達成に向けた年度目標

### 【安全・安心な教育の推進】

- ① 小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を90%以上にする。  
(R6年度 3年81.6% 4年83.6% 5年63.8% 6年86.8% 平均78.9%)
- ② 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。(R6年度7人)
- ③ 小学校学力経年調査における「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を96%以上にする。  
(R6年度 3年91.8% 4年91.8% 5年93.7% 6年89.5% 平均91.7%)

### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- ① 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を35%以上にする。  
(R6年度 3年36.7% 4年36.1% 5年25.5% 6年28.9% 平均31.8%)
- ② 小学校学力経年調査における、「国語の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より2ポイント向上させる。  
(R6年度 3年56.5ポイント 4年71.5ポイント 5年75.9ポイント)
- ③ 小学校学力経年調査における、「毎日、同じぐらいの時刻にねて、同じぐらいの時刻に起きていますか」に対して肯定的に回答する児童の割合を89%以上にする。  
(R6年度 3年77.6% 4年68.8% 5年78.8% 6年73.3% 平均74.6%)

### 【学びを支える教育環境の充実】

- ① 授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の75%以上にする。(R6年度74.7%)
- ② 第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる、教員の勤務時間の上限に関する基準2を満たす教職員の割合を100%にする。(R6年度100%)

### 3 本年度の自己評価結果の総括

#### 【安全・安心な教育の推進】

- ① 学期に1回以上、「いじめについて考える日」を設定し、道徳の授業を通して、いじめや差別を許さない学習を実施した。そのため、児童アンケートの「いじめはどんなことがあってもいけないことだと思う。」に対する肯定的な回答が95.2%という結果となった。しかし、学力経年調査結果では、最も肯定的との回答では86.3%で中期目標には達成しなかった。
- ② 全教職員で児童理解を進めるために、スクリーニング会議Ⅰを月1回程度行うことができた。そのため、関わりの薄い児童のことも知ることができ、理解を深めることができた。その結果、中期目標での不登校での改善が進んだ。また、学校生活の様子や学習内容などが分かるように、学校だよりを月に1回更新した。
- ③ 年間通して、児童集会を月に2回行った。その結果、児童アンケートにおける「自分はだれかの役に立っていると思う」の項目での肯定的な回答が、前期は71.8%だったのに対して、後期は82%と大きく向上が見られた。中期目標の学力経年調査の96%には94.7%で達しなかったが、後期は運動会や作品展などの大きな学校行事があったことや、先生方の学級での日々の指導や声掛けなどがこの結果につながったのではないかと考えられる。

#### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- ① どの学年においても、1つの単元の中に必ず話し合い活動を設定し、児童は、対話を通して自分の考えを再構築した。どのように話し合い活動を取り入れるのが児童にとって効果的なのかを、低・中・高学年で考えた。低学年では、ハンドサインを活用し、児童全員が自分の考えを示したり、児童同士の考えをつないだりすることができた。また、ペアでの話し合い活動を取り入れることで、安心して自分の考えを伝えることができた。中学年では、自由交流を取り入れ、児童が、自分のニーズに合った話し合いを自分で選択できるようにしたことで、自分の考えをより適切に整理したり、友達の考えを生かしたりする姿が見られた。高学年では、習熟度別の話し合い活動を取り入れたことにより、児童の習熟に合った内容の話し合いができた。また、習熟度の高いグループでは、児童同士が問い直しをする姿も見られた。しかし、児童アンケートにおいて「先生や友だちの話聞いて、相手の考えを理解することができる」の肯定的な回答は84.5%であり、目標の89%を達成することはできなかった。また、中期目標では、学力経年調査での最も肯定的な「当てはまる」の回答割合も35%以上についても31.8%で達成はしなかった。今後も、対話的な学習場面を意図的に設定し相手の考えを尊重しながら学ぶ態度の育成を図っていく必要がある。
- ② 本年度は、国語科で「深い学び」をテーマに研究を行った。研究授業は計画通り、各学年1回ずつの6回実施し、その他の教員も自由参加の公開授業を計画通りに行っている。研究授業の後には研究協議会を開き、教員間で授業の振り返りを行い、深い学びについて意見交換をした。児童アンケートでは、「国語科の学習がわかる」の項目で肯定的な回答をした児童は、82.3%で目標の90%は達成できなかった。その原因として、一問一答や確認読みではなく、書かれていないことを叙述から考えたり、考えたことを友達と話し合ったりする学習を多く取り入れたことが考えられる。また、国語科の研究が4年目となり、これまでの学習をふまえて、文章の表現や叙述の意図を深く考えることや、自分の考えを根拠をもって説明することを重視した授業を行ったため、「わかる」と実感するのに時間が必要だったことも原因の1つだと考えられる。中期目標に対しては、学力経年調査の結果よりどの学年も2ポイント向上させることができた。
- ③ 月に1回、各学級で清潔調べを実施し、その都度、基本的な生活習慣について指導を行った。清潔の項目に挙げられている内容だけでなく、日常生活全体を振り返ることができるよう、睡眠や食事、身の回りの整え方などにも触れながら話を行った。また、月に1回発行している保健だよりを通して保護者に対しても基本的な生活習慣に関する情報発信を継続的に行い、家庭と連携した指導をすすめた。児童アンケートの「毎日同じ時間に寝ている（起きている）」の肯定的な回答は、63.9%で目標の89%を達成できなかった。また、学力経年調査における結果でも、73.9%であった。高学年になるのに連れて習い事や家庭での生活リズムが多様化するため、就寝時刻や起床時刻を毎日同じにするのは難しく、アンケート項目に対して肯定的に回答しにくかったと考えられる。

### 【学びを支える教育環境の充実】

- ① 学校評価アンケートでは、「パソコンやタブレットを使った授業はわかりやすい」との肯定的回答が 88.9% となり、目標としていた 90%には届かなかった。しかし、中期目標の端末活用率については、活用した日数が 94.6%で大幅に達成している。

デジタル教材の活用や提示方法の工夫など、ICT を取り入れた授業改善に継続的に取り組んできた結果、一定の成果は見られたが、さらなる向上に向けて引き続き工夫が必要である。
- ② 期初に設定した指標である「ゆとりの日（ノー残業デー）」については、年間を通して週に 1 回設定・実施することができ、中間目標の指標は達成された。その結果、本校教員一人当たりの時間外勤務時間は、昨年度の平均と比較して 1 時間以上短縮することができ、時間外勤務時間の削減に一定の成果が見られた。また、学校行事部会を通して教職員から意見を募り、行事内容や業務の進め方の見直しを行うことで、業務の効率化を進めることができた。これらの取組により、教職員が心身ともに健康に働くことができる職場環境づくりにつながったと考えられる。一方で、学期末や行事前など業務が集中する時期には、取組の徹底が難しい場面も見られた。

## 大阪市立春日出小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価 (目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p><b>【最重要目標1 安全・安心な教育の推進】</b></p> <p>① 小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を90%以上にする。 (R6年度 3年81.6% 4年83.6% 5年63.8% 6年86.8% 平均78.9%) (R7年度 3年83.1% 4年88.7% 5年93.8% 6年79.6% 平均86.3%)</p> <p>② 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。 (R6年度7人) (R7年度2人)</p> <p>③ 小学校学力経年調査における「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を96%以上にする。 (R6年度 3年91.8% 4年91.8% 5年93.7% 6年89.5% 平均91.7%) (R7年度 3年94.9% 4年92.5% 5年95.4% 6年95.9% 平均94.7%)</p>	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【基本的な方向1 安全・安心な教育環境の実現】</p> <p>いじめのない安全・安心で楽しい学校生活が送れるように年間を通じて学年・学級の実態に応じた指導を継続して行う。</p> <hr/> <p>指標</p> <p>○ 学期に1回以上、「いじめについて考える日」を設定する。</p> <p>○ 各学級で年3回以上、道徳の授業を通して、いじめや差別を許さない学習を実施する。</p>	B
<p>取組内容②【基本的な方向1 安全・安心な教育環境の実現】</p> <p>児童が学校生活を安心して過ごせるように、また、楽しみに登校できるように指導支援していく。</p> <hr/> <p>指標</p> <p>○ 全教職員で児童理解を進めるため、スクリーニング会議Iを月1回程度実施する。</p> <p>○ 学校生活の様子が分かるように、学校だより、ホームページを各学年月に1回以上更新する。</p>	B
<p>取組内容③【基本的な方向2 豊かな心の育成】</p> <p>たてわり班活動をはじめとする異学年交流を通じて、自己肯定感・自己有用感の向上に努める。</p> <hr/> <p>指標</p> <p>○ 児童集会を可能な限り月に2回行う。</p> <p>○ 児童アンケートにおける「自分はだれかの役に立っていると思う」90%以上にする。 (R7年度 82%)</p>	B
<p>中期目標及び年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析</p>	
<p><b>【取組内容】</b>について</p> <p>① 学期に1回以上、「いじめについて考える日」を設定し、道徳の授業を通して、いじめや差別を許さない学習を実施した。そのため、児童アンケートの「いじめはどんなことがあってもいけないことだと思う。」に対する肯定的な回答が95.2%という結果となった。しかし、学力経年調査結果では、最も肯定的との回答では86.3%で中期目標には達成しなかった。</p>	

- ② 全教職員で児童理解を進めるために、スクリーニング会議Ⅰを月1回程度行うことができた。そのため、関わりの薄い児童のことも知ることができ、理解を深めることができた。その結果、中期目標での不登校での改善が進んだ。また、学校生活の様子や学習内容などが分かるように、学校だよりを月に1回更新した。
- ③ 年間通して、児童集会を月に2回行った。その結果、児童アンケートにおける「自分はだれかの役に立っていると思う」の項目での肯定的回答が、前期は71.8%だったのに対して、後期は82%と大きく向上が見られた。中期目標の学力経年調査の96%には94.7%で達しなかったが、後期は運動会や作品展などの大きな学校行事があったことや、先生方の学級での日々の指導や声掛けなどがこの結果につながったのではないかと考えられる。

次年度への改善点

- ① 引き続き、学年・学級に応じた指導を実施していく必要がある。さらに、学年の現状や指導内容を全体で共有することで、より系統的な指導ができ、学校全体として取り組むことで安全・安心な教育環境の実現につながると考えられる。
- ② 教室へのスマートフォンの持ち込みが難しくなり、児童の活動の様子などの撮影が厳しくなったことで、ホームページの更新が難しくなった。更新のやり方について考える必要がある。文面だけの更新も考える必要がある。もしくは、ホームページに代わる指標を検討する必要がある。
- ③ アンケート実施時に再度、行事や集会などの活動を振り返り、できていたことなどを確認し、高学年では日々の委員会活動やクラブ活動、低学年は学級の係活動や当番活動などを振り返り、日々の活動がみんなの役に立っていることを継続して伝えていく必要がある。また、今年度は全校遠足がなく、たてわり班内での関わりが少なかった。そこで、児童集会でのゲームなどをより児童同士がかかわる内容にしたり、集会以外でもたてわり班で活動する機会を増やしていくことも検討していく必要がある。

## 大阪市立春日出小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準	A:目標を上回って達成した	B:目標通りに達成した
	C:取り組んだが目標を達成できなかった	D:ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p><b>【最重要目標2 未来を切り拓く学力・体力の向上】</b></p> <p>① 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を35%以上にする。 (R6年度 3年 36.7% 4年 36.1% 5年 25.5% 6年 28.9% 平均 31.8%) (R7年度 3年 35.6% 4年 37.7% 5年 36.9% 6年 42.9% 平均 38.2%)</p> <p>② 小学校学力経年調査における、「国語の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より2ポイント向上させる。 (R6年度 3年 -4.9ポイント 4年 +4ポイント 5年 +5.5ポイント) (R7年度 4年 +12.8ポイント 5年 +3.1ポイント 6年 +4.2ポイント)</p> <p>③ 小学校学力経年調査における、「毎日、同じぐらいの時刻にねて、同じぐらいの時刻に起きていますか」に対して肯定的に回答する児童の割合を89%以上にする。 (R6年度 3年 77.6% 4年 68.8% 5年 78.8% 6年 73.3% 平均 74.6%) (R7年度 3年 67.8% 4年 73.6% 5年 70.8% 6年 83.6% 平均 73.9%)</p>	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【4、誰一人取り残さない学力の向上】</p> <p>本年度の研究主題を「深い学びの実現に向けた指導法の工夫」として主体的・対話的な学習を通して学びを深められる授業研究を行う。それにより学びを深めるために基礎となる言語の習得、言語を活用する力の習得、相手の気持ちを大切に作る習慣づけに取り組んでいく。</p> <p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国語科の学習において、1つの単元の中に1回以上話し合い活動の時間を設定する。</li> <li>○ 児童アンケートにおいて「先生や友だちの話を聞いて、相手の考えを理解することができる」の肯定的回答を89%以上にする。(R6年度 88.5%) (R7年度 84.5%)</li> </ul>	B
<p>取組内容②【4、誰一人取り残さない学力の向上】</p> <p>主体的・対話的で深い学びの授業に取り組む。</p> <p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 校内研修計画に従い、各学年で年間6回の全教員参観の授業研究を行う。それ以外の教員については、自由参加による授業研究を全教員が年間1回以上(年間20回以上)行う。(R6年度 25回実施) (R7年度 29回実施)</li> <li>○ 児童アンケートにおいて「国語の学習がわかる」の肯定的回答を90%以上にする。(R6年度 国語 89.5%) (R7年度 82.3%)</li> </ul>	B
<p>取組内容③【5、健やかな体の育成】。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 健康な生活習慣が身につくように継続的に指導する。</li> </ul> <p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 月に1回各学級で清潔調べを行い、健康な生活習慣が身につくよう児童に啓発する。</li> <li>○ 児童アンケートにおける、「毎日同じ時間に寝ている(起きている)」に対して肯定的に回答する児童の割合を89%以上にする。(R6年度 73.9%) (R7年度 63.9%)</li> </ul>	B
<p>中期目標及び年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析</p>	
<p><b>【取組内容】</b>について</p> <p>① どの学年においても、1つの単元の中に必ず話し合い活動を設定し、児童は、対話を通して自分の考えを再構築した。どのように話し合い活動を取り入れるのが児童にとって効果的なのかを、低・中・高学年で考えた。低学年では、ハンドサインを活用し、児童全員が自分の考えを示した</p>	

り、児童同士の考えをつないだりすることができた。また、ペアでの話し合い活動を取り入れることで、安心して自分の考えを伝えることができた。中学年では、自由交流を取り入れ、児童が、自分のニーズに合った話し合いを自分で選択できるようにしたことで、自分の考えをより適切に整理したり、友達の考えを生かしたりする姿が見られた。高学年では、習熟度別の話し合い活動を取り入れたことにとって、児童の習熟に合った内容の話し合いができた。また、習熟度の高いグループでは、児童同士が問い直しをする姿も見られた。しかし、児童アンケートにおいて「先生や友だちの話聞いて、相手の考えを理解することができる」の肯定的回答は84.5%であり、目標の89%を達成することはできなかった。また、中期目標では、学力経年調査での最も肯定的な「当てはまる」の回答割合も35%以上についても、31.8%で達成はしなかった。今後も、対話的な学習場面を意図的に設定し、相手の考えを尊重しながら学ぶ態度の育成を図っていく必要がある。

② 本年度は、国語科で「深い学び」をテーマに研究を行った。研究授業は計画通り、各学年1回ずつの6回実施し、その他の教員も自由参加の公開授業を計画通りに行っている。研究授業の後には研究協議会を開き、教員間で授業の振り返りを行い、深い学びについて意見交換をした。児童アンケートでは、「国語科の学習がわかる」の項目で肯定的回答をした児童は、82.3%で目標の90%は達成できなかった。その原因として、一問一答や確認読みではなく、書かれていないことを叙述から考えたり、考えたことを友達と話し合ったりする学習を多く取り入れたことが考えられる。また、国語科の研究が4年目となり、これまでの学習をふまえて、文章の表現や叙述の意図を深く考えることや、自分の考えを根拠をもって説明することを重視した授業を行ったため、「わかる」と実感するのに時間が必要だったことも原因の1つだと考えられる。中期目標に対しては、学力経年調査の結果よりどの学年も2ポイント向上させることができた。

② 月に1回、各学級で清潔調べを実施し、その都度、基本的な生活習慣について指導を行った。清潔の項目に挙げられている内容だけでなく、日常生活全体を振り返ることができるよう、睡眠や食事、身の回りの整え方などにも触れながら話を行った。また、月に1回発行している保健だよりを通して保護者に対しても基本的な生活習慣に関する情報発信を継続的に行い、家庭と連携した指導をすすめた。児童アンケートの「毎日同じ時間に寝ている（起きている）」の肯定的回答は、63.9%で目標の89%を達成できなかった。また、学力経年調査における結果でも、73.9%であった。高学年になるのに連れて習い事や家庭での生活リズムが多様化するため、就寝時刻や起床時刻を毎日同じにするのは難しく、アンケート項目に対して肯定的に回答しにくかったと考えられる。

#### 次年度への改善点

① 話し合い活動を取り入れることで、自分の考えを前向きに伝えようとする児童は増えたが、対話の深まりに課題があった。理由や根拠を基にした対話、考えの違いを生かす対話には、さらなる指導の工夫が必要であると感じた。「話し合いで子どもたちに何を学ばせたいのか」を教員が明確にもち、授業づくりを進めていくようにする。また、学年段階をつなぐ系統性にも課題がある。低・中・高学年でそれぞれ有効な手立ては見られたものの、対話を深い学びにつなげる指導の系統化が必要である。そのため、今後も教員間で、深い学びについて話し合い、考えていく必要がある。

② 「深い学び」を重視する学習を継続しつつも、児童が「できた」「わかった」と実感できるような場面を意図的に設定していく必要がある。話し合い活動においても、考えを整理する時間や共有の仕方を工夫し、児童一人一人が理解を深められるようにしていく。また、振り返りが「できた」「楽しかった」にならないように、「どのように学んだか」、「どのように考えが変わったか」まで書かせる手立てを教員間で話し合っていく必要がある。校内研修や教員研修に関しては、研究教科を中心に、授業のねらいの示し方、発問、まとめの工夫など、具体的な場面をもとにした研修を行っていく必要がある。

③ 全ての児童に「同じ時刻」に就寝・起床することを求めるのではなく、生活リズムの大切さを理解し、自分なりに整えようとする意識を高める指導へと重点を移していく。高学年は、スマートフォンやゲームの使用状況を見直し、自らの生活習慣を改善できるように指導する必要もある。また、アンケート項目を、就寝・起床時刻ではなく、睡眠時間に変更することも検討する必要がある。これからも保健だよりや学校だよりでの情報発信に加え、委員会活動などを通して、さまざまな視点から継続的に生活習慣の改善に働きかけていく。月に1度の調査だけで終わらせず、日常的な生活指導と結び付けて取り組み、継続的な声掛けを行う。

## 大阪市立春日出小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準	A:目標を上回って達成した	B:目標どおりに達成した
	C:取り組んだが目標を達成できなかった	D:ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<b>【最重要目標3 学びを支える教育環境の充実】</b> ① 授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の75%以上にする。(R7年度 94.6%) ② 第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる、教員の勤務時間の上限に関する基準2を満たす教職員の割合を100%にする。(R6年度 100%)(R7年度 100%)	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【基本的な方向6 教育DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進】 一人一台学習者用端末などのICT機器を効果的に活用する。	B
指標 ○ 心の天気の入力や日々の授業など、一人一台学習者用端末を1日1回以上活用する ○ 児童アンケートにおいて「パソコンやタブレットを使った授業はわかりやすい。」の肯定的回答を90%以上にする。(R6年度 88.9%)(R7年度 88.9%)	
取組内容②【基本的な方向7 人材の確保・育成としなやかな組織づくり】 時間外勤務時間を減少させ、教職員が心身ともに健康に働くことができる職場環境づくりに取り組む。	B
指標 ○ 「ゆとりの日(ノー残業デー)」を週に1回設定・実施する。	

## 中期目標及び年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析

## 【取組内容】について

- ① 学校評価アンケートでは、「パソコンやタブレットを使った授業はわかりやすい」との肯定的回答が88.9%となり、目標としていた90%には届かなかった。しかし、中期目標の端末活用率については、活用した日数が94.6%で大幅に達成している。
- デジタル教材の活用や提示方法の工夫など、ICTを取り入れた授業改善に継続的に取り組んできた結果、一定の成果は見られたが、さらなる向上に向けて引き続き工夫が必要である。
- ② 期初に設定した指標である「ゆとりの日(ノー残業デー)」については、年間を通して週に1回設定・実施することができ、中間目標の指標は達成された。その結果、本校教員一人当たりの時間外勤務時間は、昨年度の平均と比較して1時間以上短縮することができ、時間外勤務時間の削減に一定の成果が見られた。
- また、学校行事部会を通して教職員から意見を募り、行事内容や業務の進め方の見直しを行うことで、業務の効率化を進めることができた。これらの取組により、教職員が心身ともに健康に働くことができる職場環境づくりにつながったと考えられる。一方で、学期末や行事前など業務が集中する時期には、取組の徹底が難しい場面も見られた。

## 次年度への改善点

- ① 来年度は教員からの具体的な要望をよりきめ細かく聞き取り、ICT研修の内容をさらに充実させていく。授業改善においては、児童の理解を深めるために学習のねらいを明確にし、まとめや発表の段階で「画面共有機能」を活用して互いの考えを視覚的に比較・検討できる時間を設けるなど、児童が主体的に操作・思考する活動を積極的に取り入れる。
- 一方で、高学年を中心に端末活用の機会が増えるなか、特別支援学級の児童や課題のある児童の中には、キーボード入力に困難を感じたり、大型モニターの文字が小さく読みづらいため

に授業についていくのが難しくなったりするケースも見受けられる。そのため、ICTの利点を活かしつつも、黒板やノートといったアナログの良さを適切に組み合わせることで、個々の児童の実態に寄り添った、真に「分かりやすい授業」の実現を目指していく。

- ② 「ゆとりの日」が形骸化しないよう、既存の業務について「例年通り」にとらわれず、会議や行事の内容簡素化や回数削減及び精選を検討・実行する。あわせて、業務の見通しをもった計画的な分担を行うことで、業務が集中する時期においても実効性のある取組となるよう改善を図る。